

私の来歴と展望

北 澤 義 弘

昨年秋ヨーロッパから調査を終えて帰宅すると役所から老人保険の健康手帳と言うのが届いていた。そこにはまぎれもなく小生の氏名が記されている。役所からも老人と認定されてしまった。政府は高齢化問題に頭を痛めている一方ではこうして無理にも老人を作りだしている。ある日医院に行った。例により私立学校共済組合員証をもって行ったら、老人手帳の方がよいと言う。私は学校組合員証の方を主張したが医局側は老人の方が得でもあるしと言ってきかない。終に私も折れて言う通りになった。今後はいろいろな方面でこの種の衝突を繰り返さなければならぬまい。社会には大へんな矛盾があるようだ。本人はまだ学校出たての気分でのだが時間の有無を言わせぬ圧力には耐え難いものがある。七十年と言う年月はまことにあっけなく過ぎてしまう。学の道はやっぱり方向が見えはじめたばかりと言うのに。しかし今春からは時間の拘束を免れ、文の道に拘わったこの人生を専門と言う制約なしに古今東西に思いを馳せて活動してゆく

つもりである。

実は今後の抱負を書きたいのだが、経歴を書けと言うのであるからそれについて一通り述べることにする。本籍地は長野県諏訪郡北山村芹ヶ澤と言う山村で、父親の生誕地である。家はまだある。小生が生まれたのは福島県相馬郡中村町であった。父親が県立中学（旧制）の英語の教師であったからそこで生れて五才まで田舎生活を楽しんだ。家の東はずっと田圃でその先を常盤線の汽車が煙を吐いて走るのが遠くに見えた。この田園生活は私の精神構造に大きな影響を与えたと今も思っている。その後父の転勤で江田島の海軍兵学校官舎に移り、そこでは将来有名になった長野修身、及川古志郎など多くの海軍将星達に接する機会が多かった。さらに父の横須賀転勤により私も逗子に居住することになった。今だにそこに暮らしている。母親が仙台の人であったので戦後は仙台の祖母の家に寄宿して英文学の勉強をした。英文に限らずその頃は鏘々たる文科の学者が仙台に集まっていた

のでそこに学ぶことは幸せであつた。教授の土居光知氏の自由闊達な文学研究法は私の性分にもぴったり合つていたと思つてゐる。たゞその深さに於ては到底及びもつかないことは充分自覺してゐる。

時代は益々科学的な進展を見せ、民族学、考古学上その後の発見が著しい。それらを集約することにより、今後は民族や国家の枠を越えた文学、言語、文化の關係を見直す時が来て当然と考えられる。従来 of 英文学界だけのあり方には一種のもどかしさを感じてゐる。世界的に組織した文化文学の研究網が造られなければ全人類の古今にわたる發展を展望することが仲々できないのではなからうか。私は言語を用ひてゐる現存の人間の發生は同一箇所であり、それが時間的、地域的に世界に拡散しそれぞれ個性を獲得して來たと言う假説を抱いてゐるものである。これまでの學問領域の枠も再考すべきであらう。